

更級	紫式部	和泉式部	蜻蛉	土佐
日記	日記	日記	日記	日記
徒然草	方丈記	清少納言	十六夜	東關
章記	子記	枕草子	日記	紀行

校註

日本文學大系

第三卷



大正十四年七月二十三日印刷
大正十四年七月二十三日發行

(非賣品)

日本文學大系

第三卷

編輯者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

中塚榮次郎

印刷者

守岡功

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

發行所

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番

振替東京五二二九八番

解題

文學博士 尾 上 八 郎

土佐日記

奈良朝時代の末期から、平安朝初期にかけて、片假名、平假名があらはれたので、事を敘し、情を攄べる事が自由になつた。それで、物語の類も出來たのであるが、有識階級は、それに同ぜず、依然として漢字を用ゐる、漢詩文を書いてゐた。しかし、時勢はいつまでもかくあるべく許さない。延喜時代になると、紀貫之が出て、假名を用ゐて、漢文と比肩して、決して遜色のない國文を作つた。貫之は、平安時代に出來た新短歌の完成に努力して、それに成功したのであるが、更に散文の方面に活動して、驚くべき技倆を現はしたのである。

貫之は、當時の縉紳の子弟とおなじく、漢文によつて教育せられたので、それにも巧みであつた。新撰和歌の序は、よくこれを證してゐる。しかし、漢文は畢竟外國文で、わが國の文ではな

い。わが國の文は國語で書くべきであると云ふ見地から、純然たる國語を用ゐて國文を作つて、奉敕の書である古今和歌集の序とし、また大堰川行幸和歌の序ともした。それは、自分の習得した漢文の句法、語法、修辭法を根柢において、それを翻譯的に、國文に應用したものであつた。

古今和歌集の撰述の時、貫之は四十五六歳であつたであらうと、香川景樹は云ふ。さうすると、大堰川行幸の時は、それに二三歳を加へたのであらう。その兩者ともに立派なもので、後世の典型となつたのであるが、まだ漢文の範疇を脱してゐないものである。

貫之は、御書所預から種々の官を経て、延長八年土佐守となつた。赴任して六年たつて、承平五年に任が満ちたので、十二月の末歸舟に上つた。それから都の家に到るまでの日々の矚目の事及びそれに就いての感想を記した。これが乃ち土佐日記である。題名を一瞥すると、土佐在任中の日記のやうに思へるが、實は、歸途中の記事である。古人の命名の無造作なのは、こゝでもよく知れる。この時、貫之は七十三四歳であつたであらう。それは「七十、八十は海にあるものなり。」と、日記中にあるのに叶つてゐると、景樹は云つて居る。

この日記の文は極めて單純である、簡朴である。思ふまゝ、を書き、云ひたきまゝ、を述べてある。讀むに従つて、貫之の人格も才藻も、残らず眼前にあらはれて來る。對句を用ゐず、序詞を

使はず、照應波瀾や、頓挫抑揚や、きはだつた技巧を棄てて、たゞ率直にと心がけてある。これは嚴肅なるべき奉敕の序文でない爲でもあらうか、或は老年の故に、煩些の體裁を用ゐるに堪へなかつたのであらうか、いづれか判然しないのはあるが、結果から見ると、語熟し、想熟し、心手相應の境に到つたもので、眞の意味の國文、全然漢文の範疇を脱したものである。しかし表立つた文は猶漢文である。これではなくては、縉紳らしくない時である。よつて貫之は、「男もする日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」と冒頭に書いて、自分を女に擬してゐるのである。

日記の記事は、承平四年十二月十日、土佐國府の門出にはじまる。二十七日になつて、大津から浦戸をさす。貫之の子は、在任中に死去した。同舟の中に、子のある人がある。それを見ると悲しみが新たに催される。二十八日に浦戸から大湊に向ふ。こゝに十泊して正月八日に到る。九日になつて、初めて那波にすゝむ。十一日に室津にすゝむ。この間にも、また亡き子を思ふ。室津にいたつて、天氣を窺ふので待合はせが長い。十七日に一度舟出したが、風雨がありさうなので引き返す。二十一日になつて、やつと出る。二十九日に、土佐の泊に著く。三十日に、阿波の水門を渡つて、和泉の灘に到る。こゝまでの長い日数は、風と波とのためである。當時の海路の

困難は、想像の外にある。その上に、在任中海賊を取締つたので、それが報復に來たといふ噂もある。風波と海賊、貫之の心配は、一通ではなかつたらしい。

二月一日、和泉の灘を出たが、雨風にあふ。五日になつて小津に著く。六日、いよく淀の川尻に入る。人々は大よろこびである。七日川尻から上つてゆく。八日鳥養御牧にとゞまる。九日宇土野にとまる。十一日になつて宇土野を出て山崎に著く。こゝに十五日まで居る。京へ取りに遣つた車が來た。舟から上つて人の家に入る。十六日いよく久しぶりで陸行して、京に入る。月明に乗じて、夜更けて家にかへる。家は荒れてゐる。しかし小松がある。それを見て、失つた兒の悲しみをまた新たにする。

この二月にも及ぶ間の記事はかなり精密である。しかも、著しく滑稽味に富んでゐる。「船路なれど馬の餞す。」とか、「口綱ももろもちにて、この海邊に荷ひいだせる歌。」とか、「海はあるれど、心はすこし和ぎぬ。」とか、「西國なれど、甲斐歌などうたふ。」とかの類がそれである。これは、亡き子の悲しみの堪へがたいのを忘れむとするのと、海賊の恐れを消さむとするのに原因してゐる。これがこの日記の三大事であると、景樹は云つて居るが、かく云へば、また風波の恐れを減ぜむがためといふ一事を加へてもよささうである。まことに、種々の滑稽は外海にある間は多い

が、和泉になつては、急に少なくなつてゐる。これは、前言の一證とすべきであらうか。しかし、貫之は、技巧を弄する癖がかなり甚しく、和歌には著しく見えて、爲めに厭味をも感ぜしめてゐる。蒼茫一様の海上、風波のみが荒く、記事となるべき景致が少ないために、この癖が發露したのみであると云はれない事もない。しかし、亡き子を悲しむ一事が、全篇を一貫してゐるのは、明らかな事實である。

この日記は、貫之が歸洛後幾何もなくして書いたものであらう。自筆本が、文暦の頃には蓮華王院の寶藏に存してゐたと云はれる。それは、いつしか亡くなつたが、それを書寫したものに、前田侯爵家藏の藤原定家の本がある。定家の書寫は、文暦二年五月である。定家は眼盲の如しいふ老年で、全部を二目で寫し上げたのであるが、その最後の二頁を臨摹して、「爲令知其手跡之體、如形寫留之。」と書いて居る。それは、貫之の眞跡といふものが解らなくなつて、「謀詐之輩、以他手跡多稱其筆。」するからである。この假名の態は、今日流行のそれと違つて、著しく漢字の草體に近いものである。又その歌の書きやうも今日あるが如く別行にはせず、文と共に一行中に書き込んで、すこし闕字があるのみである。かくすべてが古態舊様を存してゐるのであるから、恐らくは、これは眞物であらう。今日、この蓮華王院の本は見る事が出來ぬのであるが、前田

家本の儼存するのは、全く定家の努力の御蔭といはなければならぬ。本編に採録したのは、實にこの本である。

蜻蛉日記

歌が感情生活の要素となつた平安朝時代に於いて、伊勢物語が先づ出て、大和物語が次いで現はれたのは當然の事である。しかし、これらは、他人の歌に關する物語、及びその收録である。刺激するところが多いにしろ、自分には縁の遠いものである。この位の事は自分にも澤山あるのみならず、それよりも身にしみぐとするものがある。これを收録して、後の世に傳はらぬまでも、後日の思出の種にしようといふ見地から出來たのが、歌中心の日記である。

紀貫之の土佐日記も、土佐から歸洛中の記事であるが、多くの歌が收録せられてある。故にこれも、歌中心の日記と云へば云はれるのである。しかし、それには、景致の日々の甚しい變化、及びそれに就いての自己の慌しい對應、感想が主となつてゐる。平板なる日常生活、いかに情海の波瀾が高いとは云へ、猶身邊には異なる現象、著しい轉變がない。たゞ應答の歌が、色彩をつ

くり、興趣を添へてゐる。故に、日常生活には、歌は非常の大事な役目をつとめてゐる。實に歌があつて日常生活に光があり、詩があるのである。従つて、日常生活の日記の、歌中心となるのは自然であらねばならぬ。而して、この日記の現存して、最も古いものは蜻蛉日記である。

蜻蛉日記の著者は、藤原道綱の母である。百人一首に、儀同三司の母とあるのと同じである。道綱の親は兼家である。兼家には、妻は幾人かあつた。藤原仲正の女、藤原國章の女、源兼忠の女皆それであり、又名のしらね町の女、又は近江などもあつた。道綱の母もその一人である。この人の父は藤原倫寧であり、兄には歌人の長能がある。妹には菅原孝標の妻があり、その子には、更級日記、濱松中納言物語等の著者の孝標の女がある。この故に、この人も才藻が豊かであつて、この蜻蛉日記の名著を貽してゐるのである。

蜻蛉日記は三卷、或は八卷ともしてある。記事は村上天皇の天曆八年からはじまる。「世の中にいとほはなく、とにもかくにもつかで世に経る人。」乃ち著者がある。容貌もよくなく、心魂もあるにもあらぬ様であるが、ある時右兵衛佐兼家から云ひ寄られる。屢々歌が来る。遂に通つて來ることになる。十月になつて、父倫寧が奥州へ赴任するので、女を兼家に頼むべく歌を残して行く。九年になる。著者は懷妊して春夏惱み暮して、八月晦に道綱を生む。元來兼家の性情は、こ

の人と相反してゐる。兼家は酒脱で賑やかなことを好む。著者は眞面目で、しんみりとした事が好きである。道綱が生れても、兩人の交情は濃くはならない。この九月に、兼家の他の女に遣る文を、手箱から發見する。十月になつて、來ない時がある。來て早く歸るので、人をつけて見せると、坊の小路の中に這入つたのが分る。その中に、曉方に來て門を叩く。明けさせないので歸る。その翌朝菊につけて、「歎きつゝ、一人ぬる夜の。」の歌を遣る。十年になる。兼家の來ない事が多くなる。來ても物も云はぬので、寂々さうやくしくて歸る時もある。しかし、他の子どもも數多ある女の處へも絶えたと云ふ噂があるので、同病相憐んで、九月の頃歌を詠んでやる。返歌もある。

年がかはつて天徳元年になる。夏の頃、町の女が産をするといふ。門前を車が通る。死にたい氣がする。男の子が生れたと聞くので、いよく堪らない。兼家が來ても、知らぬ顔をするので度々空しく歸つて行く。しかし、著者は裁縫がうまいので、衣服の仕立を頼みによこす。縫はずに返すけれども、兼家はをり／＼來る。二年になる。町の女は子を産んだ後、兼家との中が悪くなる。その上に、その子さへ死んだと云ふ。著者は、「我思ふには、今少しうち勝りて歎くらむと思ふ。」と痛快な氣持になる。が兼家は、それから自分の方に専ら來るといふのではない。道綱が四歳で、片言を云ふほどになつてゐるので、兼家が歸る時に、「今來む。」といふのを眞似をして歩

く。これから後の天徳二年、三年、四年、應和元年の記事が闕けてゐる。

應和二年になつて、兼家は四位になる。兵部大輔にもなる。秋になつて山寺へ上る事もある。かくして三年になる。道綱が九歳で、殿上を許される。秋、兼家と同車して河原に出る。康保元年になる。著者の母が久しく煩ひ、秋の初に空しくなる。著者は悲しみに堪へずして、氣絶するやうになる。人々は、その方にかゝつて大騒ぎをする。兼家も来る。處は山寺で、霧は籠を籠めてゐる。家に歸つて四十九日をする。二年になつて、一周忌を山寺でする。歸つて來て徒然なので、琴を弾いて、また悲みを催す。三年になつて、四月に祭見物に出る。兼家も出てゐるので、贈答をする。八月に、兼家との間に、はかない事から争ひがはじまる。兼家は道綱を呼んで、「我は今は來じとす。」と云ひ置いて出てゆくと、道綱は烈しく泣く。それから五六日來ない。心細うて居ると、兼家の使つた泔坏の水がまだその儘で、上に塵が浮いてゐる。あさましくなつて、「絶えぬるか。」の歌をよむ。かやうなはない身の上を神に申さうと思つて、稻荷にまゐり、また賀茂に詣でる。かくて四年になる。五月に村上天皇が崩御になり、冷泉天皇が御即位になる。兼家は東宮頭となる。人が喜を云ふ。七月に、藤原高光が出家する。妻もまた尼になつたので、深く同情する。

改まつて安和元年になる。九月に泊瀬詣をする。宇治に著いて網代を見る。泉河もわたる。椿市に泊る。御寺に著いて見ると、様々の参籠人がある。歸さには兼家の御蔭で、迎の人が多く来る。しかし、何事も思ふやうにもない。この物はかない事を思ふと、あるかなきかのかけらふの心がする。で、この日記も「蜻蛉の日記」と云ふべしと云つて居る。二年になる。三月に、西の宮の左大臣高明が流される。御子達も別々になる。これを悲しいと思ふ。高明の北の方も尼になれたと聞いて、長歌を詠む。兼家が御嶽詣をするので、十五歳の道綱が伴をしてゆく。どうかと思つてをると、七月の一日に無事に歸る。

また改まつて、天祿元年になる。三月に内裏の賭弓がある。道綱が出る。これに就いて、大いに心配してゐると、成功をした。また舞も上手にした。兼家も大喜であり、著者も「常はゆかぬ心ちも、あはれに嬉しきこと限りなし。」又「憂き身かとも覺えず。嬉しきことどものにも似ぬ。」と満悦してゐる。しかし、兼家の來ることは少なく、六月には夜見ぬことは三十日あまり、晝見ぬことは四十餘日にもなつた。落つる涙をおしかくす心地が堪へがたいので、唐崎へ祓もせうと云つて行く。曉に出て關にいたる。鳥の三つ四つと居ると思ふのは、釣舟らしい。大津から濱に出る。祓のところでは、風が吹いて浪が高い。果ててから歸る。走井の邊で休む。日が暮れてか

ら家に入ると、兼家が晝の中に来て歸つたといふ。留守を窺つたやうにも見える。夢のやうな氣がする。後に一寸來てまた來ぬので、形をかへて、世を思つてみよう。と云ふと、道綱も、自分も法師にならう、と云つて泣く。七月になつて、兼家はなくなられた實賴の召人の、近江といふ女に通はれると云ふものもある。此處彼處に參詣して、氣を御霽らしなさい。と云ふものもあるので、石山に參ることにする。有明の月をみつゝ出る。夜になつて御堂に上る。勾欄におしかゝつてゐると鹿が通ふのが見える。明けてから見渡すと、霧が立つて、川の向には放ち馬があまり歩くのもある。曉に歸る。空の月は細く照らしてゐる。波の音がさら／＼とする。瀬田の橋の下で夜が明ける。千鳥の飛び違ふが見える。濱邊に來ると、迎の車が來てゐる。朝の中に京に著く。八月になつて、兼家は大將になる。道綱も元服する。十二月に敘爵する。

天祿二年になる。正月に兼家の車が表を通る。しかし寄らずに過ぎる。また通る。男どもが中門を開けて跪いてをるのに過ぎてしまふ。しかしその後に来て戲言などを云ふ。知らぬ顔をして居るので、二十餘日も來なくなる。二月になつて、近江に繁く御通になる、と人が云ふ。徒然とあるよりは、長精進をしようと思ふ。兼家の文が來るが構はず父の家に行つてしまふ。四月朔の日から精進を始める。道綱にもさせる。「疾く死なせたまひて、菩提かなへ給へ。」と祈ると、涙が

ほろ／＼とこほれる。兼家の車が通るが、過ぎてしまふ。思ひ出すのも苦しいから、鳴瀧の寺に行かうと用意して出かける。寺に著いて居ると、人が慌しく來て兼家の消息を告げに來る。闇の夜が更ける。大門の方に、「おはします／＼、と云ふ聲がする。木の間から燭ひかりが見える。兼家が來たのである。道綱が來て、御迎にまゐりました、と云ふが著者は出ようとせぬ。道綱は、一丁程の石壇を幾遍にも往復するので、困じてしまつた。どうしても出ないので、兼家もやむなく歸つて行く。晝は行をし、夜は主の佛を念ずる。螢も見え、杜宇も鳴く。水鶏も鳴く。道綱は稀に京へ出て、日が傾くと、また山寺に戻つて來る。人々は、今の中に御歸りなさい。過ぎると變な事になりませう、と云ふ。ところに兼家が來る。散つたものを集め、袋に入れるべきは入れて、どしどし片づけてしまふ。著者は呆れて見てゐる中に、車に乗ることになつてしまふ。かくして京に歸るには歸つたが、兼家はあまり來ない。ふと來ては、香を投げ散らし、數珠を鴨居に上げたりにして騒ぐ。その中にまた初瀬に參詣をする。道で、宇治で鵜船をみて、面白いと思ふ。兼家は著者を雨蛙と名づけて笑ふ。尼が歸つたとの意である。

天祿三年になる。兼家は、正月に大納言になる。喜を云ふ人があるが、嘲弄せられるやうで嬉しくもない。兼家は、をり／＼來るが、心細いので、賤しくない女の子を一人得て後見をしよう

と思ひ立つ。兼忠の女に出来た兼家の子が、美しくて、志賀の邊にあると聞く。それと思ふ。遂に相談をきめて迎に道綱をやる。その中に、兼家が来る。人の捨てた子を取つたと云ふと、兼家は、自分が年がよつたので、若い人を求めたのか、と云ふ。呼び出して見せると、「こんなになつたのか。」と兼家も驚いて遂に打ち泣く。この子も泣く。物語のやうである。をり／＼火事がある。憎いと思ふ兼家の思ひ人の所も焼ける。三月に、八幡の祭を見物する。五月に、石山で逢つた大法師が御祈をしようと云ふ。返事に、「今は限りに思ひ終てたる身をば、佛もいかゞはしたまはむ。只今は、この大夫(道綱)を、人々しうあらせ給へなどばかり申し給へ。」と云つてやる。八月になる。「たゝむ月に死ぬべし。」といふさとしもあつたから、この月と思つてゐるのに、何事もなくて、九月にもなる。十月には紅葉見にも行く。

天延元年になる。兼家の來ることが極めて少ない。他の所へ繁く行くといふ。家も荒れて行くので、父の所へ渡る。縫物の誂はあるが、夢の通路も絶えて、年は暮れてしまふ。二年になつて正月に月下の山を見ると、久しう絶えた人が思ひ出されて涙がこぼれる。しかし道綱が右馬助になつたので喜ぶ。司の頭は叔父にあたる。この人が、志賀からの女を得ようと願ふ。兼家は許す氣があるが、著者は反對する。頭は遂にやつて来る。清けな人の、「なよ、かなる直衣、太刀引き

佩き、例の事なれど、紅色の扇すこし亂れたるを手まさぐりて、風早き程に、纓吹き上げられつゝ立てる様」は、「繪に書きたるやうなり。」と、著者も讚美してゐるが、女を許さうとはしない。その中に、「頭の君は、人の妻を盗みとりてなむ、ある所に隠れるたまへる。」といふものがある。八月になつた、痘瘡が流行する。道綱も罹つていたく煩ふ。九月になつて平癒したが、伊尹の子舉賢、義孝二人がなくなられたと騒ぐ。これを聞くにも、癒つたことがめでたい。子の病に關して兼家の文が珍らしく来る。臨時の祭の時、道綱が俄に舞人に召される。これにつけて、また珍らしい兼家の文が来る。十二月になつて、歌の贈答をする。道綱の正月の用意などをする中に、歳暮の日になつた。

これで日記は終つてゐる。天曆八年から、天延二年まで二十一年間の日記であるが、初めの中は簡畧で、後になるほど精密である。ことに、天祿二年あたりが、最も精しいのは、兼家と著者との感情が阻隔して、著者が、鳴瀧の山籠をするといふ大事件があるからである。これが、實にこの日記の中心であり、山である。しかし著者は、かく敘情に巧みであるのみならず、敘事にも長じてゐる。鳴瀧の記事でもさうであるが、初瀬、唐崎、石山等の敘事は、その情景が目に見えるやうである。石山の御堂の勾欄に凭つて居ると、今も猶、著者の眺めた夕暮を髣髴せしめる。